



すり傷・きり傷への対応



子どもが何らかのけがをすることはよくあることです。

家庭での対応でよいのか、病院へ受診すべきものか判断がつかない場合もあると思います。

今回は、子どもがけがをした時の受診の目安から傷に対する基本的な対応の方法をお話します。

ケガをしてできる傷には、すり傷ときり傷などがあります。

すり傷は、走って転び、肘や膝などをすりむくことが多いですが、顔から先に地面に落ちて顔を大きくすりむくこともあります。きり傷は、興味のある物に触ろうとして、紙のふちや缶切りで空けたふたなどで指を切ることがあります。

子どもがけがをしたときは、まずは保護者が冷静になり、落ち着いて判断・処置することが大切です。保護者が不安になりすぎると、子どもは自分が悪いことをしたのではないかと罪悪感をもつことがあります。



家庭での対応について



- ① 傷口を水道水で洗い流す。砂や泥、ホコリなどの汚れをしっかりと流す。

以前は、消毒液を使用していましたが、水道水できれいに洗うだけでよいとされています。



- ② 出血がみられれば、傷口を心臓より上にして、ハンカチなどで傷を押さえて圧迫止血する。



- ③ ラップや市販の傷用絆創膏（湿潤効果のあるもの）などで傷を覆う。

湿潤療法・・・傷口のさらさらした滲出液には、傷を治す成分が含まれています。

乾燥させるより、保湿されている状態をたもつことが効果的とされています。



- ④ 毎日あるいは数日に1回、①～③の処置を繰り返す。

この際、傷口が感染していないか（傷の赤み・熱感・膿の出現などに注意）観察する。

最初のうちは、傷口からの滲出液が多い為、1日1回程度の交換が必要です。

絆創膏の中で感染を起こさないように、絆創膏をかえるときは、水道水で洗い流しましょう。

滲出液が多い場合は、一般的なガーゼでは傷口にくっついてしまう恐れがあるので、傷口に付着しないガーゼを選びましょう。

また、ガーゼを交換する際は、新しく出来た皮膚を剥がしたりしないように、シャワー等でテープをふやかしながらはがすと痛みも少ないです。



傷跡の紫外線対策について

傷口にできた新しいピンク色の皮膚は紫外線に対する感受性が高く、色素沈着しやすいことが知られています。はっきりとした医学的根拠はありませんが、一般的には数か月程度、夏場や紫外線の強い場所への外出時に、日焼け止めを塗る・傷跡に直射日光が当たらないようにする対策が考えられます。顔など目立たせたくない部分の傷跡は1年程度行くと安心です。



病院への受診の目安について

☆小児科では治療が限られてしまいます。形成外科・皮膚科を受診しましょう。

まず、水道水で洗い流し傷口を確認します。

- 傷が深く、傷口が開いている場合
- 傷口に異物（砂利やガラスなど）が入り込んでいる場合
- 傷口を押さえ続けても出血が止まらない場合
- 傷口の様子をみていたのちに、感染を疑うような症状が現れた場合
（傷の赤み・熱感・腫れ・悪臭の膿など）

上記がある場合や、保護者が「自分では対応できない」と思う傷の場合は病院へ受診しましょう。

※判断出来ない時は、薬は塗らずに受診してください。

受診時に医師に伝えてほしいこと

- どのような状況でけがをしたか
「屋外・室内で転んだ。」「錆びついた物で切った。」など感染リスクや異物混入の可能性などの判断ができます。ケガをした場所やケガをした部分を写真を撮っておくと状況が分かりやすいです。
- 4種混合ワクチンを接種しているか
破傷風菌はあらゆる傷口から入りこみ、発症すると重篤な感染症です。
場合によっては、接種・追加接種が必要になります。
- 基礎疾患をもっている場合
血をさらさらにするお薬を飲んでいるなど。

休日や夜間の場合は、#8000に電話すると、近所の病院を教えてください。

1つの病院だけでなく、対応出来ない場合もあるため、2・3つの病院を聞いておくといいですよ。